

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」における改稿の様相 : Textual Criticismに向けた一試行
Author(s)	山根, 由美恵
Citation	Problématique , 4 : 80 - 108
Issue Date	2003-07-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047495
Right	
Relation	



村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」における改稿の様相

—Textual Criticism に向けた一試行—

山根 由美恵

Yumie YAMANE

■ 問題の所在

現代は物語不在の時代、物語消費の時代などと呼ばれている。出版物は飛躍的に増加しているが、それらは一時的な情報の産物や手段としての価値しか持たない。この時代は、いかに新しい情報を、より早くより多く手に入れるかが目的とされている。

また、現代という時代の特徴の一つとして、秩序の崩壊とそれに伴った情報の多様化が挙げられる。かつて情報は操作された一つの権力であったが、個人から個人という枠組みへと変化しつつある。世界には既に無限に近いネットワークが存在している。情報が拡大するにつれ、価値観も多様化する。もはや全てを統合化できる論理、イデオロギーは存在しないかのようにみえる。

村上春樹は、現代を物語不在の時代と認識しつつも、「物語」の力を信じ、文学の可能性を問い続けている作家の一人である。村上には、「物語」のための冒険」(昭60・8『文學界』)以来、へ物語とは何か」ということについて、積極的に発言してきた。最新作「海辺のカフカ」についてのインタビューでは、次のように語っている。

教養体系みたいなものがガラガラ変わっていく中で小説というのがどのようにして生き残っているのかということ、僕は、やっぱり考える。(中略) 僕の考える物語というのは、まず人に読みたいと思わせ、人が読んで楽しいと感じる形、そういう中でとにかく人を深い暗闇の領域に引きずり込んでいける力を持ったものです。できるだけ簡単な言葉で、できるだけ深いものごとを、小説という形でしか語れないことを語る、ということをしなないことには、やはり、負けていくと思う。(後略)

僕はむしろ文学というものを、ほかのものでは代替不可能な、とくべつなメディア・ツールとして、積極的に使って攻めていきたいというふうに考えるんです。物語の力というものが限る限り、それはじゅうぶん可能なことだと思います。「海辺のカフカ」を語る」

「人を深い暗闇の領域に引きずり込んでい」という村上春樹文学は、日本という枠を越え、31ヶ国で翻訳され同時代の世界で

享受されている。彼が拘り続けている物語性を問うためには、精緻なテクストの分析が不可欠であることは言うまでもない。ただ、その際に、村上の文学テクストが、大きく改稿されていたという点についても同時に捉える必要がある。その改稿には、単なる字句の訂正というレヴェルを超えた、すなわち、テクストの「物語性」に変更をもたらすような大きな改訂も含まれているからである。

改稿の問題で注目すべきは、平成二年二月から平成三年三月にかけて上梓された『村上春樹全作品 1979-1989』(全八巻 講談社、以下『全作品』と記す)である。『全作品』は、処女作「風の歌を聴け」(1979)から平成元年(1986)までのテクストが収録されている、村上の自選選集である。収録に際し、村上は短編56編を大幅に改稿した。この改稿は作家の創作過程を如実に示す貴重な資料と言えよう。しかし、管見の限りでは、この改稿の検討という視点は村上春樹研究では等閑視され、研究対象としても取り上げられることがなかったように思われる。

現在刊行中の『村上春樹全作品 1990-2001』(全七巻、講談社)には、未発表作品1編、改稿作品44編が収録される予定である。村上が『全作品』という場を書き下ろしとは違った母胎として認識し、実験を試みていることは間違いない。

ところで、村上には、レイモンド・カーヴァーの全作品を翻訳し、自ら全集の編集を手がけ、彼から様々に影響を受けている。主に一九八〇年代に活躍した短編・詩中心の作家であるカーヴァーは、多くの自作を大幅に改稿した作家として知られている。改稿によって、結末は全く異なったものとなり、カーヴァーはそれぞれに応じて「ロング・バージョン」、「ショート・バージョン」として位置づけている。

『全作品』における改稿には、このカーヴァーの影響が見られるテクストがある。作家の意識の変遷、カーヴァーの影響とその意味など、多くの重要な問題がそこに見出される。この検討 (Textual Criticism) と、改稿という視点から見た比較文学研究がこれからの村上春樹研究の新しい角度となろう。

本稿では、村上の唯一の自選選集である『村上春樹全作品 1979-1989』に着目し、改稿という視点から物語性を捉えてみたい。その方法として、単行本(オリジナル)と『村上春樹全作品 1979-1989』との比較という観点から、Textual Criticism (本文批評) と関連させつつ検討することとする。ここでは、村上春樹研究における Textual Criticism の可能性を探るとともに、その背後にある物語性を探る一階梯としたい。

「中国行きのスロウ・ボート」は、昭和五十八年五月に中央公論社から刊行された村上の第一短編集である。七つの収録作は、書かれた時期によって二つに大別される。すなわち、次のようである。

「中国行きのスロウ・ボート」(初出 昭55・4『海』)、「貧乏な叔母さんの話」(初出 昭55・12『新潮』)、「ニューヨーク炭鉱の悲劇」(初出 昭56・3『ブルータス』)、「カンガルー通信」(初出 昭56・10『新潮』)は、「羊をめぐる冒険」(初出 昭57・8『群像』)以前に書かれた短編集である。これらは、主人公「僕」の意識が中心となっており、テクストに提示されたモチーフは問題提起的なものとなっている。

「午後の最後の芝生」(初出 昭57・8『宝島』)、「土の中の彼女の小さな犬」(初出 昭57・11『すばる』)、「シドニーのグリーン・ストリート」(初出 昭57・12『海』臨時増刊 子供の宇宙)は、「羊をめぐる冒険」以後に書かれた短編集である。これらは、「僕」と他者との交流にその主眼が置かれ、そのモチーフも一応の帰結が見られる(それが完全に解決されているかは別として)。前半四作と後半三作との間にこのような差異が生まれた理由の一つには、「羊をめぐる冒険」という長編の存在が影響していると考えられる。「風の歌を聴け」(初出 昭54・6『群像』)、「一九七三年のピンボール」(初出 昭55・3『群像』)直後に書かれた前半の短編集は、「風の歌を聴け」や「一九七三年のピンボール」と同じくモチーフの提示に重点が置かれており、テクストの展開やモチーフに最終的な解決を付けるところまで辿り着いていない。それに対して、「羊をめぐる冒険」という筋の通った長編を初めて書き上げた後に書かれた後半三作は、問題に一応の解決が見られ、主人公と他者との交流も描かれている。

この第一短編集「中国行きのスロウ・ボート」は、平成二年九月、「村上春樹全作品 1979-1989①」(平2・5、講談社)に収められた処女作「風の歌を聴け」、第二作「一九七三年のピンボール」は、意図的に全く手を加えなかったと村上は記している。基本的に、長編は殆ど手を入れず(字句の訂正などはある)、短編は改稿するという姿勢のようである。

村上は改稿に際して次のように述べている。少し長いが引用してみたい。

今回全集に収録するにあたって、いくつかの短編にはかなり大幅に手を入れることにした。これは今の時点で読み返してみても気になる部分が多々あったからである。僕は原則的に一度発表した作品にはそれ以上手を加えないことにしている。何故ならそれをやり始めるときがな

また作品というものはたとえいささかの欠点があったとしても(あるいは作家がそれを気に入らないと思ったとしても)、定点観測的な意味を持つひとつの資料として、オリジナルのかたちのものはやはりきちんと残しておくべきだと考えているからである。しかし今回は全集という形での出版であり、単行本のオリジナル・ヴァージョンとは違うもうひとつ別の選択肢を提供できるまたない機会であったので、思い切って改訂を加えることにした。大幅に手を加えたものもあれば、字句表現の修正程度にとどまったものもあった。改訂については読者にもいろいろと異論があるかもしれない。しかし作者としては、当時表現しようとして、十全には表現しきれなかった事柄を幾分なりとも明確にすることを基本的な方針として改訂を加えた。つまり今の時点から過去の自分自身に手を貸すということである。しかしもちろんいくばくかの問題があったとしても、ここはもう余計な口だしはせずに放っておいた方がよからうと思えるところも多々あった。妙に手を加えてすっきりさせるよりは、不透明なままの思いを伝えた方が良いかもしれないことだ。若書きというのは結局そういうことである。下手にしか、不透明にしか伝えられないこともけっこう沢山あるのだ。

ただし、ここはこうしておけばよかったなと今になって後悔する部分もあって、これは書きなおした。余計な部分は削り、足りない部分は肉づけた。

そのような補修工事のあとで思うのだが、僕という人間、つまり村上春樹という作家のおおかたの像は、この作品集の中に既に提示されている。たしかにそれ以降、僕も僕なりに歳をかさねてより多面的に物を見て、文章を書けるようにはなった。自分がやりたいこともより明確に見えるようになった。作家としての自分の力が今の段階でどの程度のものなのかということもだんだん把握できるようになってきた。しかし僕の世界というもののありようは未完成なりに、どこちないなりに、バランスが悪いなりに、この処女短編集におおむね提示されているように思える。スタイルなり、モチーフなり、語法なり、そういうものの原型はここに一応出揃っていると云っているのではないかと思う。

「自作を語る」短編小説への試み⁷

改稿に際しても前半と後半のテクスト群には差異がある。例えば、前半四作の改稿には「状況」や「説明」などの付加が多いのに対し、後半三作では「削除」の傾向が強いことである。モチーフの生かし方に前半と後半で差異があることがわかる。

村上自身は「当時表現しようとして、十全には表現しきれなかった事柄を幾分なりとも明確にすることを基本的な方針として改訂を加えた」と述べているが、この改稿は、次に引く山下浩氏の「コンセプトの変化」を伴う「垂直」な改訂⁸となっていると考えられる。

初出から数年後になされる、いわば「同時代」の改訂と、二十年も三十年も後の、作者晩年の改訂とを同列に論じるのは危険である。「時間」だけが絶対的な条件ではないが、作者が、いったん「完成」した初期の作品に後年手を入れると、その作品は「洗練」され「完成度」をさら

に高めるといふよりも、むしろ「変質」する——コンセプトの変化——と考えた方がいいのではないか。

「改訂」は、その性質上二種類に大別できよう。一つは、作品を「洗練」し「強調」する、いわば「水平」(同一平面上)方向の改訂であり、もう一つは、作品の「質や種類を変化させる」、「垂直」な改訂である。「垂直」な改訂によって変質した本文が作品としてすぐれていれば、それはそれとして独立した価値を有するであろうが、「本来」の作品とは区別しなければならぬ。

次に、この七つの短編のうち、冒頭の作であり、村上の処女短編でもある「中国行きのスロウ・ポート」を取り上げ、改稿とその様相(コンセプトの変化)を報告したい。

■「中国行きのスロウ・ポート」における改稿の内実

私はかつて単行本版「中国行きのスロウ・ポート」を、「僕」が三人の中国人に対して無意識の悪意を持っており、それに気付いていく過程が描かれている物語と読んだ。そのポイントは三点ある。一、中国人教師が禁じた落書きを想像する意味。二、無意識に中国人女子大生を、門限に間に合わない逆回りの山手線に乗せ、更に住所を書いたマッチも捨ててしまった行為の裏にある、グロテスクと形容された意識。三、高校の中国人の同級生を思い出せないこととあわせて語られる過去に対する忘却の意味。これら三人の中国人の話は、「僕」が無意識のうちにやってしまった悪意の発露であると考えられる。単行本版「中国行きのスロウ・ポート」は、「僕」が三人の中国人に行ってしまった悪意の行為(後にトラウマとなる)を語るという形を取りながら、無意識に潜む内なる差別の根深さ、恐ろしさを浮き彫りにするという物語化が行われている問題作である。

『全作品』版はかなり改稿されている。この様相の全貌は、末尾の「中国行きのスロウ・ポート」の改稿対応表に記載した。ここでは、単行本から『全作品』の改稿においての顕著な違いを四点掲げ、その「コンセプトの変化」の実態を見ることとする。(単行本の頁、行数。全は『全作品』の頁、行数)

①「記憶の破片」「見た記憶がある」といった回想の視点の強調が全編にわたって挿入されている。(※便宜的にこの項目に限り、『全作品』版に挿入されたものをゴシック体太字で表示する)

- ・現わし始める。記憶の破片。(全P 11 11)
- ・争った年だった。僕はその年にテレビでその試合を見た記憶がある。(全P 11 12・13)
- ・そのまま多摩川べりまで歩いて歩いたかもしれない。僕は今でもその夜の空気の気配のようなものを思い出せる。(全P 24 3・4)
- ・こんなによく昔のことがかり覚えていたら、この先の人生の記憶をキープする余地はもうないんじゃないかと不安になるくらい記憶が鮮明なんだ。(全P 31 8・9)
- ・いったい本当の俺は何処に生きている俺だろうってね。今ここにある物事がひょっとしてただの記憶にすぎないんじゃないかと思うことさえある。(全P 31 12・14)

*ここでは、回想の視点の強調によって、「僕」の過去を相対化していると考えられる。

②2章の末尾、「僕」と女性の落書きについてのエピソードが削除されている。(単P 18 11P 19 15) 32行分。

*落書きのエピソードの削除は、中国人教師の発言を是とするものとなり、何故この話を語らなければならなかったのかという必然性が薄れてしまっている。

③3章は「僕」自身の心情に焦点を当て、相手への関心ではなく「僕」自身の問題として焦点化される。

・彼女を誘った。(単P 23 9)

中国人の女の子を誘ってみた。彼女を口説こうとか、そういう風に思ったわけではない。僕には高校時代からつきあっているガールフレンドがいた。でも正直に言つて、僕らのあいだは以前ほどしっくりとはいつていなかった。彼女は神戸にいて、僕は東京にいた。会えるのは年に二カ月か、せいぜい三カ月だった。僕らはまだ若かったし、それだけの距離と時間の空白を克服できるほどお互いのことをしっかりと理解していたわけではなかった。これから先、そのガールフレンドとの関係をいつたかどうか、僕には見当もつかなかった。僕は東京ではまったくのひとりぼっちだった。友だちらしい友だちもいなかったし、大学の授業は退屈だった。僕としては正直なところ少し息ぬきをしかつたのだ。女の子を誘って踊りに行って、軽く酒を飲んでうちとけた話をして、楽しみたかった。それだけのことだった。僕はまだ十九だった。なんといつてもいちはばん人生を楽しみたい年齢だった。(全P 22 181P 23 7)

「ねえ、もう一度初めからやりなおしてみないか?……たしかに僕は君のことを殆んど何も知らない。でもね、もっと知りたいと思う。それにもっと君のことを知れば、もっと君を好きになれそうな気がするんだ」
(単P 29 8・10)

「ねえ、僕には僕という人間をうまく君に説明することはできない。僕にもときどき自分という人間がよくわからなくなることがある。自分が何をどう考えて、何を求めているのか、そういうことがわからなくなると、それから自分がどういう力を持っていて、その力をどういう風に使っていけばいいのか、それもわからない。そういうことをひとつひとつ細かく考えだすと、ときどき本当に怖くなる。怖くなると、自分のことしか考えられなくなる。そしてそういうときには、僕はすごく身勝手な人間になる。そうしようとも思わないのに、他人を傷つけたりもする。だから僕には自分が立派な人間だととて言えない」
(全P 27 15・20)

*彼女に対して行ってしまった無意識の悪意(山手線の逆回りに乗せること)は、単行本版では「グロテスク」と形容されていたが、『全作品』版ではその意識は削除される。彼女に対する意識の代わりに「僕」自身の探求へと焦点が変わっている。

④4章の高校の同級生の中国人は分身的に描かれている。「僕」と反対の性格であり、「鼠」と類似するような人物として設定されている。

・「やあ」とその男は言った。(単P 32 8) ↓気がつくとその男は僕の前に立っていた。(全P 30 3)

・「クイズなんかじゃないよ、つまりね、今の俺には名前なんてないも同じなんだよ。たしかに昔は俺にもちゃんとした名前があったさ。まだ汚れていないピカピカのやつがね」彼はそこで気持良さそうに笑った。「まあそれを君が思い出すもよし、思い出さずともまたよし。正直言ってみて、どちらにしたところで俺には殆んど関係ないんだよ」(単P 34 12・15)

・「名前なんてどうでもいいんだよ、本当に」と彼は言った。「まあそれを君が思い出すもよし、思い出さずともまたよし。どっちでもいいんだ。どっちでもかわりないんだから。でももし君が俺の名前を思い出せなくてそんなに気になるのなら、俺のことを初対面の相手だと思えばいいよ。それだってべつに話をするのに支障はないんだから」(全P 32 5・8)

・僕は黙って肯いた。(単P 38 1)

・返事のしようもなかったから、僕は黙っていた。

「俺一人のせいばかりでもないんだ」と彼は言った。「いろんなややこしいことが重なってね。でもまあ結局は俺のせいなんだけども」

僕はそのあいだ高校時代の彼のことを思い出そうとしていた。でもひどく漠然としか思い出せなかった。一度誰かの家の台所のテーブルに座って、「一緒にビールを飲みながら音楽の話をしたことがあるような気がした。たぶんいつかの夏の午後だった。でもそれも確かではなかった。それはずっと昔に見たまま忘れていた夢みたいに思えた。」
(全P 35 16 | P 36 2)

*中国人の同級生は、「気がつくとその男は僕の前に立っていた」と存在感を曖昧にさせられている。また、夏にビールを飲みながら話をするというモチーフは、「風の歌を聴け」の「鼠」を想起させる。「鼠」のイメージは分身的であり、「ずっと昔に見たまま忘れていた夢」や「僕の方もとくに理由もなく、なんだか不思議に懐かしかった」(全P 36 6・7)という表現からも分身的な存在(影)として描かれていることがわかる。

更に、結末部では、明確に「ある意味ではそれは中国という言葉によって切り取られた僕自身である」(全P 38 18・19)と書かれている(『全作品』のみの表現)。

村上自身は「全集収録にあたって中盤以降にかなり手を入れた。なるべくオリジナルの雰囲気を変えないように細部の交通整理をしたつもりだが、やはり少しは色あい¹⁰が変化したかもしれない」と述べている。しかし、その内実は「色あい」の変化という程度には留まっていない。

単行本版において中国(アジア)との関係に目を向けていたものが、『全作品』版では「僕」という個人の問題へ焦点化されている。つまり、落書きのエピソードの削除や回想の視点の強調によって、「僕」の過去を相対化し「僕」という一人の人間の探求にその主眼が置かれているのである。登場する三人の中国人たちは「僕」の影・分身として「僕」を追いつめていく存在となっている。ここでは『全作品』版の主軸が「僕」中心へ内化する方向へと変化していると言える。

この理由は「ダンス・ダンス・ダンス」(初出 昭63・10、講談社)の後の改稿であることが考えられる。「ダンス・ダンス・ダンス」は、羊男やいるかホテルに象徴されるように、寓意化された自意識がテキストの柱となっていた。その問題意識が連続して『全作品』版「中国行きのスロウ・ポート」においても焦点化され、主人公「僕」個人の問題へと問題意識が集中しているのである。単行本版と『全作品』版を比較し、私は単行本版の問題意識を評価したい。単行本版は、マイノリティーや対アジア関係の問題が尖锐化しているからである。『全作品』版に登場する中国人たちは「僕」の影・分身にすぎず、中国人である必然性を失っている。

東アジアとマイノリティの関係は重要な問題である。村上は内化（あるいは寓意化）に特徴がある作家であるが、この改稿は、内化の方向に意識が行きすぎ、その尖鋭的な問題がcaえって不明瞭になってしまった。二作を比べると、この改稿は後退とも言える。

ただ、この内化と東アジアとの関係は、「ねじまき鳥クロニクル」において一つの形となって結実すると考えられる。内化（寓意化）と対社会意識とのバランスは、平成二年の段階では、未だ発展途上であったと言えるだろう。

■ 今後の課題

見てきたように、「中国行きのスロウ・ボート」は、単行本と『全作品』ではそのコンセプトが違うテキストであると言える。そしてそれは、テキストの物語性をも変化させている。同様の「コンセプトの変化」を伴う「垂直」な改訂は、前半の「貧乏な叔母さんの話」、「ニューヨーク炭鉱の悲劇」、「カンガルー通信」においても見られる。前半に較べると後半の「午後の最後の芝生」、「土の中の彼女の小さな犬」、「シドニーのグリーン・ストリート」は「水平」な改訂が多い。これらについては、その資料と併せて、今後考えていきたい。

その研究の方向として、作家の意識の変遷（「コンセプトの変化」というだけに留まらない視点が必要であると考えられる。一つの方法は、この『全作品』という場を作家の書くという行為、創作という営為の過程として捉え、その文学（物語性）を解明していくことである。ロラン・バルトは、「作家を捉えている（彼自身の目から見て）のは、彼が書いたものではなく、書くという執拗な決意である」と述べている。村上も書くという行為、創作そのものの営為ということに拘りを持っている。

何故人は自己表現しなければならないのか、というのは僕にとっては永遠の疑問ですね。（中略）

ひと昔前の文学青年のように、書くことが自分の使命であるという風には僕にはとても思えないんです。だから小説を書きながら、何故自分は小説を書くのかと考えているんです。同時に書くという作業によって、その作業をとおしてその問題を解明したいというふうに考えているんです。

物語そのものと物語を生み出す場というものを同時に捉えていくことは、村上文学の物語性のみならず、現代の物語の可能性を問うという大きな問題に繋がっていく「問題領域」であるように思われる。

*テキストは、『中国行きのスロウ・ボート』（昭58・5、中央公論社）、『村上春樹全作品 1979-1989③』（平2・9、講談社）による。傍線は私に付した。初出との異同は別稿で触れることとする。

注

- (1) 野家啓一氏は「現代においては、人間の『物語る』能力は著しく衰退しているように見える」、「科学による真理の占有を背景にして、『近代的自我』と『市民社会』とが手を携えてありのままの真実を至上の価値として称揚したとき、物語はその衰亡を余儀なくされたのであった」と語っている。（『物語行為論序説』（『物語（現代哲学の冒険8）』平2・9、岩波書店））
- 大塚英志氏は80年代を「物語消費」の時代と捉え（『定本物語消費論』平13・10、角川文庫）、東浩紀氏は90年代から現代にかけて、「物語消費」から「データベース消費」の時代へ入ったと述べている（『動物化するポストモダン』平13・11、講談社現代新書）
- (2) 「現代の物語とは何か」（平6・7『新潮』河合隼雄との対談）、「物語」で人間はなにを癒すのか」（『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』平8・12、岩波書店）、「譲り渡された自我、与えられた物語」（『目じるしのない悪夢』『アンダーグラウンド』平9・3、講談社）等。
- (3) 『村上春樹 ロング・インタビュー』『海辺のカフカ』を語る（平15・4『文学界』）
- (4) 平成十五年二月十九日付『朝日新聞』による。
- (5) レイモンド・カーヴァーの改稿は数多い。一例として、『村上春樹全作品 1979-1989③』と同じ年に、村上が全集として翻訳・刊行した第三短編集『愛について語るときに我々の語ること』収録17作品の改稿の様相を掲げる（『レイモンド・カーヴァー全集②』平2・8、中央公論社）の解題（村上春樹）による。17作品中、9作品に別バージョンがあり、題のみの変更も合わせると11作品に手が加えられていることになる。「↑」は『愛について語るときに我々の語ること』以降に発表された作品、「↑」はそれ以前に発表された作品を示す。
- 「ダンスしないか？」（1978年版と1981年版がある）
- 「ミスター・コーヒーとミスター修理屋」↓「みんなは何処に行ったんだ？」（第五短編集『ファイアズ』収録）
- 「私にはどんな小さなものも見えた」↑「いいものを見せてあげるよ」（単行本収録なし）
- 「菓子袋」↑「浮気」（第二短編集『怒りの季節』収録）『怒りの季節』は後に解体され、収録作品の大半は別の本にばらばらに吸収される
- 「風呂」↓「ささやかだけれど、役にたつこと」（第四短編集『大聖堂』収録）
- 「出かけるって女たちに言ってくるよ」↑（*雑誌掲載時は『友だち』、題の変更）
- 「デニムのあとで」↑（*雑誌掲載時は『コミュニケーション・センター』、題の変更）
- 「足もとに流れる深い川」↑（『怒りの季節』にロング・ヴァージョン収録）
- 「私の父が死んだ三番めの原因」↑「ダミー」（『怒りの季節』収録）

- ・「ある日常的力学」↑「ささやかなこと」(単行本収録なし)↑「私のもの」(「怒りの季節」収録)
- ・「何もかもが彼にくっついていった」↑「隔たり」(「怒りの季節」収録)
- (6) 村上は二作について次のように述べている。「自作を語る」台所のテーブルから生まれた小説」(村上春樹全作品 1979-1989①)平2・5、講談社)

この全集に収録するにあたって、多くの短編は多少なりとも加筆しているわけだが、この二作についてはまったく筆を入れなかった。入れ始めるときがないだろうと思っただけもあるが、あえて入れたくないという気持ちの方が強かった。先にも書いたように、このふたつの作品はある種の不完全さと表裏一体となって成立していると思うからである。

- (7) 【村上春樹全作品 1979-1989③】(平2・9、講談社)
- (8) 山下浩【本文の生態学】(平5・6、日本エディタースクール出版部)
- (9) 拙稿「村上春樹『中国行きのスロウ・ポート』論―対社会意識の目覚め―」(平14・3【国文学放】)
- (10) 注7に同じ。
- (11) バルトは次のように記している(ヘロラン・バルト「エッセ・クリティック」「序章」(昭47・5、晶文社)。
 書く者の目から見れば、エクリチュールは一連の実践的作業のうちに尽き果てるものだ。作家の時間は作業的時間であり、歴史的時間ではなく、作家は観念の発展の時間とはあいまいな関係しかもたない。作家が観念の運動を共有しないからだ。エクリチュールの時間は事実、いずれの時刻にも属さない時間である。書くことは、前方へ投げかけることであるか、さもなければ終結することではあっても、決して「表現」することではない。はじめとおわりとのあいだには一個の鎖の環が欠けており、しかもこのひとつの環こそ本質的なもの、作品そのものの環であるかも知れないのだ。おそらくひとは、一個の観念を物質化するためよりも、労苦することそのものが幸福であるような、ひとつの労苦を汲みつくすために、書く。清算することに、エクリチュールのもつ二種の使命がある。(中略) 作家を捉えている(彼自身の目から見て)のは、彼が書いたものではなく、書くという執拗な決意である。
- (12) 「物語」のための冒険」(昭60・8【文学生界】)

〈対応表 凡例〉

- テキストは『中国行きのスロウ・ポート』(昭58・5、中央公論社)、『村上春樹全作品 1979-1989③』(平2・9、講談社)を用いる。頁数、行数はこれらのテキストに対応する。
- **削除** は、対応部分が削除されていることを示す。**挿入** は、挿入されている直前の部分を記し、**挿入** という記号の後の部分が実際に挿入されているものである。

単行本		『中国行きのスロウ・ポート』改稿対応表		全作品	
1					
P 7 6・7	推定である。どちらでもいい。どちらにしたところで違ひなんてたいていしてない。正確に言うなら、まるでない。	P 11 6・7	推定であるが、どちらにしたところで違ひはない。正確に言うなら、まったくない。		
P 8 5	そう、	P 11 11	現わし始める。 挿入 記憶の破片。		
P 8 9	玄関の脇	P 11 12・13	争った年だった。 挿入 僕はその年にテレビでその試合を見た記憶がある。		
P 8 10	とても気持の良い	P 12 1	気持の良い		
P 8 12・13	ひどく忙しそうに	P 12 3	とても忙しそうに		
P 8 15	その煙草を	P 12 5	煙草を		
P 9 1	興味を持つ?	P 12 8	興味を持つだろうか?		
P 9 3	存在するの?	P 12 10	存在するだろうか?		
P 9 4	もったもな疑問だった。	P 12 11	それらはもったもな疑問であるように思えた。		
P 10 7	皮の匂い	P 13 9	革の匂い		
P 10 9・10	大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる。	P 13 11	大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる。		
P 10 11	今だに	P 13 12	いまだに		
P 10 15・16	大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる。そしてそのことばを	P 13 16・17	大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる。そのことばを		
P 11 2	そして死は	P 13 19	死は		
2					
P 12 17	膨らませていった	P 15 12	膨らませてきた		
P 13 2	添って	P 15 14	沿って		
P 13 4	パテオ	P 15 15	パティオ		
P 13 12	おそらく我々受験生	P 16 2	我々受験生		
P 14 4	その脇	P 16 9	そのわき		

P 16	17	一番若い
P 17	17	中国人教師のことばだけだ。
P 18	18	削除
P 19	11	中国人教師のことばだけだ。そして顔を上げて胸をはることを、誇りを持つこと。
P 18	15	いちばん若い
P 17	17	それから六年か七年たった高校三年生の秋、ちょうど同じように気持の良い日曜日の午後、僕は同じ坂道をクラスメイトの女の子と歩いていた。僕は彼女に恋をしていた。彼女が僕をどう思っていたのかはわからない。とにかくそれは僕たちの最初のデートであり、二人で図書館に行った帰り途だった。僕たちは坂道のまん中あたりで喫茶店に入り、コーヒーを飲んだ。そして僕は彼女にその中国人小学校の話をした。僕が話し終ると彼女はクスクス笑った。「不思議ね」と彼女は言った。「私も同じ日に同じ会場でテストを受けていたのよ」
P 18	15	「まさか」
P 18	15	「本当よ」彼女はクリームを薄くカップの縁にたらしながらそう言った。「でも教室は違ってたらしいわね。そんな演説はなかったもの」
P 18	15	彼女はスプーンを取り、カップをのぞきこむようにして何度かコーヒーをかきまわした。
P 18	15	「監督の先生は中国人だった？」
P 18	15	彼女は首を振った。「覚えてないわ。だってそんなこと考えつきもしなかったもの」
P 18	15	「落書きはした？」
P 18	15	「落書き？」
P 18	15	「机にさ」
P 18	15	彼女はカップの縁に唇をつけたまま、しばらく考えていた。
P 18	15	「さあ、どうかな、よく覚えてないわ」と彼女は言っただけに笑った。
P 18	15	「昔のことだもの」
P 18	15	「でもさ、とても綺麗なジカビカの机だったじゃない。覚えてない？」と僕は訊ねた。
P 18	15	「ええ、そうね、そうだったかもしれないわね」と彼女はあまり興味なさそうに言った。
P 18	15	「なんていうか、すぐつるつるという感じの匂いがしてたんだ、教室じゅうにさ。うまく言えないけれど、本当に薄いヴェールみたいなさ。それで……」と言っただけ、僕は右手でコーヒー・スプーンの柄を持って、少し考え

P 17	17	た。「それから、机が四十個、ぜんぶジカビカだったんだ。黒板もとても綺麗な緑色でね」
P 17	17	我々はしばらく黙っていた。
P 17	17	「落書きしなかったと思う？ 思い出せない？」と僕はもう一度訊ねた。
P 17	17	「ねえ、本当に思い出せないのよ」と彼女は笑いながら言った。「そう言われれば似たような気はしないでもないけど、そんな昔のことだから……」
P 17	17	おそらく彼女の言ったことの方がまともなだろう。何年も前にどこかの机の上に落書きしたかどうかなんて、誰も覚えてなんかいない。昔のことだし、それにどちらでもないことなのだ。
P 17	17	彼女を家まで送り届けたあと、僕はバスの中で目を閉じて一人の中国人の少年の姿を思い浮かべてみた。月曜日の朝、自分の机の上に誰かの落書きを発見した中国人の少年のことを、である。
P 17	17	沈黙。
P 20	2	結構
P 21	3	なるだろう。
P 21	6	働いていた。
P 21	7	まったく質の違う
P 21	8	価値はある」という意味での
P 21	9	ものだった。
P 21	11	辛うじて支えられて。
P 21	12・13	最後まで喧嘩もせずに彼女と共同作業ができたのは僕一人だけだった。
P 21	13	僕と彼女とがとくに親しかったわけではない。
P 21	14	一週間
P 21	14	その日の午後、
P 21	16	最初ほんの小さな手違いだったのだが、それが彼女の頭の中で少しずつ
P 21	6・11	そもそもの原因はちよつとした作業手順の狂いだった。そうなのはた
P 21	5	その日の昼前、
P 21	4	二週間
P 21	2・4	僕と彼女は始めのうち殆んど口もきかなかった。何度か話しかけてみたのだが、彼女は会話をするのに対して気が進まないように見えたので、それ以上はあまり話しかけないようにしていた。
P 20	18・19	辛うじてひとつにくられ支えられて
P 20	16	価値はあるかもしれない」という意味あいで
P 20	15	根本的に質の違う
P 20	14	働いた。
P 20	12	なる。
P 19	13	けっこう
P 20	12	結構
P 21	3	なるだろう。
P 21	6	働いていた。
P 21	7	まったく質の違う
P 21	8	価値はある」という意味での
P 21	9	ものだった。
P 21	11	辛うじて支えられて。
P 21	12・13	最後まで喧嘩もせずに彼女と共同作業ができたのは僕一人だけだった。
P 21	13	僕と彼女とがとくに親しかったわけではない。
P 21	14	一週間
P 21	14	その日の午後、
P 21	16	最初ほんの小さな手違いだったのだが、それが彼女の頭の中で少しずつ

		大きくなり、やがてとりかえしのつかない巨大な混乱へと姿を変えた。そのあいだじゅう彼女は一言も口をきかずに、その場にじっと立ちすくんでいた。
P 22	4	僕は作業の一切をストップし、
P 22	5・7	何もまずいことはないんだと説明した。根本的な間違いではないし、間違ったところを最初からもう一度やりなおしても、それでたいして作業が遅れるわけではないのだ。コーヒを飲んでしまうと、彼女は少しおちついたようだった。
P 22	8・10	「ごめんさい」と彼女は言った。 「いいよ」と僕は言った。 それから我々は
P 22	12	僕たち
P 22	12	小さな出版社
P 22	12	簡単で、しかもつまらない仕事だ。
P 22	15	僕たち
P 22	16	僕たち
P 22	17	ほんやりと新聞やら雑誌やらを読んで過した。時折、気が向くと話もした。
P 22	6	僕ら
P 22	7・9	ほんやりと過した。何よりも体を暖めるのが休み時間の主要な目的だった。でも彼女がパニックを起こしてからは、僕らは少しずつお互いの話をするようになった。彼女はきれいにしかしゃべらなかったが、少したつとだいたいの状況がわかってきた。
P 22	4・5	得なかった。挿入 これじゃアンカレッジ空港で雪かきのアルバイトをしているのあまり変りないじゃないかと思うくらい寒かった。
P 22	3	僕ら
P 21	20	文京区の小さな出版社
P 21	20	倉庫の隣には汚い川が流れていた。簡単で、退屈で、しかも忙しい仕事だった。
P 21	20	僕ら
P 21	13・16	大丈夫。何も心配することはないと言っただけでよかった。手遅れになるというようなことじゃないし、間違ったところを最初からもう一度やりなおしても、それでたいして作業が遅れるわけではないのだ。たとえ遅れたところで、それで世界が終わるわけではないのだ、と。彼女はうつろな目をしていたが、それでも黙って肯いた。コーヒを飲んでしまうと、彼女は少し落ちついたようだった。
P 21	17・18	「ごめんさい」と小さな声で彼女は言った。 昼食の時間に我々は
P 21	13	僕は作業を中断し、
P 21	13	しかに彼女の責任といえは責任だったのだが、僕から見ればそんなものはよくある失敗だった。ちよつとつかりしてドジったのだ。誰でもやることだ。でも彼女にはそれは思えないみたいだった。小さなひびが彼女の頭の中で少しずつ大きくなり、やがてとりかえしのつかない巨大な深淵へと姿を変えていった。彼女はその先に一歩も進めなくなってしまうたのだ。彼女は一言も口をきかずに、文字どおりその場にじっと立ちすくんでいた。

P 23	3	行ったことはなく、彼女の通った
P 23	3・4	彼女はある女子大に籍を置き、
P 23	4	駒込にある兄のアパートに
P 23	9	彼女を誘った。
P 23	10・11	五秒ばかり首をかしげてから、喜んで、と彼女は言った。「でも踊ったことなんてないのよ」 「簡単さ」と僕は言った。
P 23	13・14	僕たちはまずレストランに入ってビールとピザでゆっくり食事を済ませてから二時間ばかり踊った。
P 23	11	一度も行ったことはなく、通った
P 22	12・13	中国語は殆んどできなかったが、英語は得意だった。彼女は都内の私立の女子大に通っていて、
P 22	17	駒込のアパートで兄と
P 22	17	取ったあとで、僕は挿入 ちよつと迷ってから、
P 22	18	その中国人の女の子を誘ってみた。彼女を口説こうとか、そういう風に思っただけではない。僕には高校時代からつきあっているガールフレンドがいた。でも正直に言って、僕らのあいだは以前ほどしつくりとはいわなかった。彼女は神戸にいて、僕は東京にいた。会えるのは年に二ヶ月かせいぜい三ヶ月だった。僕らはまだ若かったし、それだけの距離と時間の空白を克服できるほどお互いのことをしつかりと理解していたわけではなかった。これから先、そのガールフレンドとの関係をいついどういう風に展開させていけばいいのか、僕には見当もつかなかった。僕は東京ではまったくのひとりぼっちだった。友だちらしい友だちもいなかったし、大学の授業は退屈だった。僕としては正直なところ少し息ぬきをしたかったのだ。女の子を誘って踊りに行って、軽く酒を飲んでうちとけた話をして、楽しめたかった。それだけのことだった。僕はまた十九だった。なんといつてもいちはん人生を楽しみたい年齢だった。
P 23	8・10	彼女は五秒ばかり首をかしげて考えていた。「でも踊ったことなんてないのよ」と彼女は言った。 「簡単だよ」と僕は言った。「踊るなんていうほどのことでもないんだ。音楽にあわせて体を動かしてればいいんだよ。誰だってできる」
P 23	12・15	僕らはまずレストランに入ってビールを飲み、ピザを食べた。もうこれで仕事は終わったのだ。もう二度とあの寒い倉庫に行って本を運ばなくてもいいのだ。そのことで僕らはすこく解放的な気持になつていった。僕はいつもより沢山冗談を言い、彼女はいつもよりよく笑った。食事を済ませてから僕らはそのデイスコティックに行つて二時間ばかり踊った。
P 23	16・17	匂いが漂っていた。挿入 フィリピン・バンドがサンタナのコピーをやっているようなデイスコティックだった。

P 23	16	古いアルバムの写真のように素敵だった。	P 23	18・19	倉庫にいるときは全然違って見えた。踊ることに馴れてくると、彼女はそれを楽しむようになった。
P 23	17	何曲か踊ってから僕たちは店を出た。	P 23	20	くたくたになるまで踊ってから僕らは店を出た。
P 24	1	体はまだあたたまってたので僕たちは	P 24	1	体はまだ暖まっていたので僕らは
P 24	3	春休みはまだ半分残っていたし、何にもまして僕たちは	P 24	2・3	春休みはまだちゃんと半分手つかずで残っていたし、何よりも僕らは
P 24	3・4	多摩川べりまでだって歩いたかもしれない。	P 24	3・4	そのままだ摩川べりまでだって歩いたかもしれない。僕は今でもその夜の空気の気配のようなものを思い出せる。
			P 24	5・6	戻らなくちゃいけないのよ」 挿入 彼女はとても申し訳なさそうに僕にそう言った。
			P 24	7	「ずいぶん厳しいんだね」 挿入 と僕は言った。
			P 24	8・9	「ええ、兄貴がうるさいの。 挿入 保護者ぶってるのよね。まあ一応世話になってるから文句も言えないし」と彼女は言った。でも彼女がそのお兄さんを好いていることは口ぶりでもよくわかった。
			P 24	10	「靴を忘れないようにね」 挿入 と僕は言った。
			P 24	11	彼女は笑った。「ああ、シンデレラね。大丈夫、忘れないわ」
P 24	10・11	彼女は恥かしそうに笑った。			
		「ああ、シンデレラね。大丈夫、忘れないわ」			
P 24	13・15	「また誘ってもいいかな？」	P 24	13・15	「ねえ、もしよかったら電話番号を覚えてくれないかな」と僕は彼女に訊いた。「また今度どこかに一緒に遊びに行こう」
		「ええ」彼女は唇を噛んだまま何度か肯いた。「かまわないわ、ちつとも」			
		僕は彼女の電話番号を訊ね、それをデイスコティックの			
P 24	16	電車がやってきてそれに彼女を乗せ、	P 24	16	電車がやってきたので僕は彼女を乗せ、
P 24	17	電車が動き出すと僕は煙草に火を点け、緑色の電車がフォームの端に消えて行くのを見届けた。	P 24	17	電車が動き出すと僕は隣のブラットフォームに移り、池袋方面に行く電車を待った。僕は柱よりかかって、煙草を吸いながら、その夜のことを順番に思い返してみた。レストランからデイスコから散歩まで。悪くない、と
		僕は柱よりかかって、そのまま煙草を最後まで吸った。そして煙草を吸			

		いながら、なぜだかはわからないけれど、気持が奇妙にぶれていることに気がついた。			
P 25	4・14	様々な街の音が、淡い闇の中にじんんでいた。僕は目を閉じ、息を深く吸いこみ、頭をゆくりと振った。それでも気持のぶれはもとに戻らなかった。まずいことは何も無いはずだった。手際が良いというほどではないにしても、最初のデートにしては、僕は結構うまくやったはずだった。少なくとも手前はさちんとしていた。	P 25	3・9	様々な街の音がひとつに入り混じって、淡い闇の中にほんやりとじんんでいた。僕は目を閉じ、息を深く吸いこんだ。まずいことは何も無い、と僕は思った。しかし彼女と別れてから、何か不思議な感じで僕の胸につかえていた。飲み込もうと思っても、がさがさとしたものが喉にひっかかっていて飲み込めないのだ。何かが間違っているのだ。僕は何かとんでもない失敗を犯してしまったような気がした。
		しかしそれでも、僕の頭の中で何かひっかかっていた。とても小さな何か、言葉にならない何かだった。何かどこかで確実に損われてしまったのだ。僕にはそれがわかっていて、何か損われてしまったのだ。			
		その何かに思いあたるまでに十五分かかった。十五分かけて、僕は自分が最後にひどい間違いをしてしまったことにやっと気づいた。馬鹿げた、意味のない間違いだった。しかし意味のないぶんだけ、その間違いはグロテスクだった。つまり僕は彼女を逆まわりの山手線に乗せてしまったのだ。	P 25	10・12	僕がその何かに思い当たったのは山手線の電車を目白駅で降りたときだった。そこで僕はやっと気づいた。僕は彼女を逆まわりの山手線に乗せてしまったのだ。
P 25	15	何故そんなことをしてしまったのか、わからなかった。僕の下宿は目白にあったのだから、彼女と同じ列車に乗ればそれで済んだはずのことだった。ビール？ あるいはそうかもしれない。それとも僕は自分のことで頭がいっぱいになりすぎていたのかもしれない。とにかく何か間違った方向に流れてしまったのだ。			
P 26	2・4	乗り替えない限り……。しかしそうはしないだろう、というのが漠然とした僕の予感だった。早く気づいたとしても、いや例えドアの閉まる前からそれに気づいていたとしても。	P 25	14・17	乗り換えていれば別だ。でも僕には彼女がそうするとは思えなかった。彼女はそういうタイプではないのだ。間違えた電車に乗せられたらずっとそのままだ乗っているタイプなのだ。それにだいたい彼女には始めからちゃんとわかっていたはずなのだ。自分が間違った電車に乗せられているということが、やれやれと僕は思った。
P 26	7・14	僕を見て彼女は力なく笑った。「間違えちゃったんだ」僕は彼女と向き合うようにして、そう言った。彼女は黙っていた。「何故かはわからないけれど、とにかく間違えちゃったんだ。どうかしてた	P 25	19	僕を見ると、彼女は足を止めて、笑えばいいのか怒ればいいのか決め兼ねるような表情を顔に浮かべた。僕はとにかく彼女の腕をとってベンチに座らせ、その隣りに腰を下ろした。彼女はバッグを膝の上に置いてそのストラップを両手で握り、足を前にはばし、白い靴の先をじっと見ている。

んだよ、きつと」

「……」

「それで待ってんだ。君に謝ろうと思って」

「彼女はコートポケットに両手をつっこんだまま口をすぼめた。」

「本当に間違えたの？」

「本当……、もちろんさ。でなきゃこんなことになるわけないじゃないか？」

P 26 16 P 27 6

「僕が？」彼女が何を言おうとしているのか、僕にはよくわからなかった。

「何故僕がそんなことをすると思う？」

「知らないわ」

彼女の声は今にも消え入りそうだった。僕は彼女の腕をとってベンチに座らせ、僕も並んで腰を下ろした。彼女は足を前にのばし、白い靴の先をじつと見ていた。

「何故、わざとやったと思ったの？」僕はもう一度そう訊ねてみた。

「怒ったのかと思ったのよ」

「怒る？」

P 27 8 P 14

「何故？」

「だって……、早く帰るって私が言ったから」

「女の子が早く帰るって言うたびに腹を立ててちや身が持たないよ」

「それとも私と一緒にいるのがつまんなかったのよ、きつと」

「まさか。誘ったのは僕の方じゃないか」

「でもつまんなかった。そうでしょう？」

「つまんなくなんかないよ。とても楽しかった。」

P 27 15 P 16

あなたが本当に間違えたんだとしても、それはあなたが心の底でそう望んでいたからよ」

P 28 5 乗客をはき出し、彼らの姿が

P 28 7 P 29 1

「お願い。もう私のことは放っておいて」

僕は何も言えずじつと黙っていた。

P 26 15 P 16

そんなはずないわよ。それは自分でもよくわかるのよ。あなたが本当に間違えたんだとしても、それはあなたが実は心の底でそう望んでいたからよ」

P 26 18 彼女は言った。挿入 そして首を振った。

P 27 2 乗客をはき出していった。彼らの姿が

P 27 4 P 9

「お願い。もう私のことは放っておいて」彼女は涙に濡れた前髪をわきにやって微笑んだ。「最初は私も何かの間違いだろうって思ってたの。だからやって微笑んだ。」

P 26 12 P 14

「どうして僕が怒っているなんて思ったの？」

「わからない」と彼女は消え入りそうな声で言った。「私と一緒にいるのがつまらなかつたからじゃない」

「つまらなくなんかないよ。君と一緒にいてとても楽しかった。」

P 26 7 「わざとやったのかと思ったわ」挿入 と彼女は言った。

P 26 8 P 10

「わざと？」

「だから、怒ったのかと思ったのよ」

「怒る？」彼女が何を言おうとしているのか、僕にはよく理解できなかった。

僕は彼女に謝った。どうしてかはわからないけれど、ついうっかり間違えたんだと僕は言った。きつとぼんやりしてたんだ。

「本当に間違えたの？」と彼女は訊いた。

「当たり前だよ。でなきゃこんなことにならないじゃないか」と僕は言った。

「本当にもういいのよ」と彼女は続けた。「正直言って、あなたといる時はとても楽しかった。こんなのって久しぶりだったの。だからとても嬉しかった。いろんなことがうまく行きそうにも思えたわ。山手線の逆まわりに乗せられた時だって、まあいいや、と思ったの。何かの間違いだろうってね。だけ……」彼女の声がつまり、涙の粒が彼女のコートの膝を黒く染めていった。

「だけどね、電車が東京駅をすぎたあたりから、何もかもが嫌になっていっちゃったの。もうこんな目にあいたくない、もう夢なんて見たくないってね」

そんなに長く彼女がしゃべったのは、それがはじめてだった。彼女がしゃべり終えると、長い沈黙がまた僕たちのあいだに下りた。

「悪かったと思う」と僕は言った。冷やかな夜の風が、夕刊をばらばらにほぐして、フォームの端まで運んでいった。

P 29 2 P 4

わきにやって微笑んだ「いいのよ。そもそもここは私の居るべき場所じゃないのよ」

彼女の言う場所が

P 29 6 P 7

そのささやかな温かみが、僕の心に長いあいだ忘れられていた幾つかの古い思い出を呼び起こした。

P 29 8 P 30 2

「ねえ、もう一度初めからやりなおしてみないか？……たしかに僕は君のことを殆んど何も知らない。でもね、もっと知りたいと思う。それにもっと君のことを知れば、もっと君を好きになれるような気がするんだ」

彼女は何も言わなかった。彼女の指が僕の手の中で僅かに動いただけだった。

「きつとうまくやれると思う」僕はそう言った。

「本当に？」

「多分ね」と僕は言った。「約束はできない。でも努力するよ。それに、もっと正直になりたいと思う」

「私、どうすればいいのかしら？」

「明日会いたい。いいかい？」

彼女は黙って肯いた。

「電話するよ」

P 27 15 P 28 14

「ねえ、僕には僕という人間をうまく君に説明することはできない。僕にもときどき自分という人間がよくわからなくなることがある。自分が何をどう考えて、何を求めているのか、そういうことがわからなくなるんだ。それから自分がどういう力を持っている、その力をどういう風に使っているのか、それもわからない。そういうことをひとつひとつ細かく考えだすと、ときどき本当に怖くなる。怖くなる、自分のことしか考えられなくなくなる。そしてそういうときには、僕はすごく身勝手な人間になる。そうしようとも思わないのに、他人を傷つけたりもする。だから僕には自分が立派な人間だととても言えない」

僕はその先をうまく続けることができなかった。だからそこで僕の話はぶつんと途切れてしまった。

彼女はその続きを待つように、じつと黙っていた。そして相変わらず自分の靴の先を見つめていた。遠くの方から救急車のサイレンの音が聞こえた。

P 27 10 P 12

わきにやって力なく微笑んだ「いいのよ。そもそもここは私の居るべき場所じゃないのよ。ここは私のための場所じゃないのよ」

彼女の言う場所が

削除

P 33 13	ひとつ残らず	P 31 4	本当にひとつ残らず
P 33 13	どうにも忘れようとするほど、	P 31 5・6	俺だっているなことをさっぱり忘れてしまいたいと思う。でも忘れようとするほど、
P 33 15・16	僕は、意識の半分で一人きりの時間を邪魔されたことうんざりし、それでも半分は彼の話術にひきこまれ始めていた。	P 31 6・9	思い出してくるんだよ。 挿入 寝ようと思えば思うほど目がさえてくることがあるだろう。あれと同じだよ。どうしてそんなことになるのか、自分でもよくわからない。覚えてははずのないことまで思い出すんだ。こんなによく昔のことがかり覚えていたら、この先の人生の記憶をキープする余地はもうないんじゃないかと不安になるくらい記憶が鮮明なんだ。
P 34 3・5	「ないね」そんなつもりはなかったのだけれど、僕のことばはひどく素気なく響いた。でも相手は少しも傷ついたようにはみえなかった。彼は楽しそうに何度か背いてから話しつづけた。 「そういうわけで君のことも実によく覚えてるんだよ。」	P 31 11・14	まるで今そこにいるみたいない気分になる。それで時々自分でもわからなくなってしまうんだ。いったい本当の俺は何処に生きている俺だろうってね。今ここにある物事がひよとしてただの記憶にすぎないんじゃないかと思うことさえある。
P 34 11・15	クイズはあまり好きじゃないんだ 「クイズなんかじゃないよ、つまりね、今の俺には名前なんてないも同じなんだよ。たしかに昔は俺にもちゃんとした名前があったさ。まだ汚れていないピカピカのやつがね」彼はそこで気持良さそうに笑った。「まあそれ	P 31 15・16	僕はほんやりと首を振った。 「君のことも実によく覚えてる。」
P 35 1	流れた、ってね、	P 32 10	流れた、という文章が
P 35 1・2	覚えてるかい？」	P 32 10・11	覚えてる？」と彼は言った。
P 35 3・8	高校時代？ 「まったく十年もたてば実いろんなことが変わるものさ。もちろん今ある俺は十年前の俺があつてこそ存在するわけなんだが、実感としてはどうもピンとこないね。どこかで俺自身の中身がすり変わったようでもある。どう思う？」 「わからないな」 彼は腕を組んで椅子に深く身を埋め、こんどはどうか、うしろのかという表情を浮かべた。	P 32 12・18	高校時代？ ということは、この男は高校時代の知り合いなのだろうか？ 「たしかにそれとおなじだよ。この間、橋の上に立ってぼおっと下を見てたんだ。そうしたら、その英語の例文をふと思いついた。実感としてよくわかったよ。なるほどな、時間というのはこういう風に流れてたんだなってさ」 彼は腕を組んで椅子に深く身を埋め、曖昧な表情を顔に浮かべた。それはあるひとつの表情ではあつたけれど、それがいったいどのような感情を意味しているのか、僕には全然理解できなかった。表情を作っている遺伝子がどこどころで擦り切れているみたい感じた。
P 35 9	彼はそのままの姿勢で僕に	P 32 19	彼は僕に
P 35 10	「ああ」	P 32 20	僕は背いた。
P 35 12・15	「いないよ」 「俺には一人いるよ。男の子でね」 子供の話はそれで終り、僕たちは黙り込んだ。僕が煙草をくわえると、彼がすぐライターで火を点けてくれた。	P 33 2・8	「いない」 「俺には一人いる。男の子だけ」と彼は言った。「もう四つなんだ。幼稚園に行ってる。元気が取り柄だ」 子供の話はそれで終り、僕らはそのまま黙り込んだ。僕が煙草をくわえると、彼がすぐライターで火を点けてくれた。すごく自然な手つきだった。僕は他人に煙草の火を点けてもらったり、酒を注いでもらったりするのあまり好きではないけれど、彼の場合はほとんど気にならなかった。火を点けてもらったことにはしばらく気がつかなくなつた。
P 36 2	「たいしたものじゃないけどね」	P 33 10	「ちよつとした商売」
P 36 2	「たいしたものじゃないけどね」	P 33 12	「そ。たいしたものじゃないけどね」
P 36 2	「たいしたものじゃないけどね」	P 33 12・15	挿入 彼は何度か背いただけで、あえてそれ以上の質問をしなかった。仕事の話をしたくないというのではなかった。でも話し始めるのと長い話になるし、それをいちいち全部話すには僕はいささか疲れすぎていた。それに僕は相手の名前さえ知らないのだ。

P 36 3 およそ向かないように	P 33 16 商売になんておよそ向かないように
P 36 4 「そう？」と僕は言った。	P 33 18 僕は微笑んだ。
P 36 6 今でも	P 33 20 今でも相変わらず
P 36 9 「そう、持ってる？」	P 34 3 「そう、百科事典は持ってる？」
P 36 14・P 37 3 その男への興味が、一瞬のうちに消えた。僕はため息をついて煙草を灰皿でもみ消した。顔が少し赤くなったような気がした。 「欲しいことは欲しいんだけど、今は金がないんだ。借金をやっど返しはじめたばかりでね」 「おいおい、よせよ。恥かしがらる必要なんて何もないよ。貧乏なのはこちらも同じことさ。共に同じ天を仰ぐってね、そんなところだよ。それに何も君に百科事典を売りつけようってわけでもない。実のところを言えば、俺は日本人には売らなくてもいいことになってるんだよ。なんていうか、取り決めでね」	P 34 6・7 「そりゃ、あれば読むだろうね」挿入と僕は言った。でも今のところ、僕の住んでいる部屋にはそんなもの置き場所だってない P 34 8 歩いているんだ」挿入と彼は言った
P 36 11・12 「本当々」 僕は思いあつた名前を口にした。	P 34 9・15 その男への好奇心がすつと消えた。なるほど、彼は百科事典を売っているのだ。僕は冷たくなったコーヒを一口すすり、それを音を立てないように皿に戻した。 「欲しいことは欲しい。あればいいだろうとは思う。でも、残念ながら今は金がないんだ。本当にまるでないんだよ。借金を抱えていて、やっど返しはじめたばかりだ」 「おいおい、よしてくれよ」と彼は言った。そして首を振った。「何も君に百科事典を売りつけようとしてるわけじゃないんだ。俺だつて負けず劣らず貧乏だけど、そこまでは落ちぶれてじゃない。それに実を言うと俺は日本人には売らなくてもいいことになってるんだよ。これは取り決めなんだ」
P 37 5・10 電話帳で都内の中国人の家庭をビック・アップしてね、かたつぱしから戸別訪問するわけさ。誰が考えついたかは知らないけど、まあ上手いアイデアだよな。それに売れ行きだつて悪くはないんだ。ドアのベルを押して名刺を出す。それだけさ。いわゆる同胞のよしみでね……」 何かが突然頭の中のキイをはじいた。 「思い出した！」	P 34 16 「日本人？」挿入と僕は言った。 P 34 17・P 35 3 中国人にだけその百科事典を売るんだ。電話帳で都内の中国人の家庭をビック・アップしてね、リストを作って、かたつぱしから戸別訪問していきんだ。誰が考えついたかは知らないけど、まあなかなか上手いアイデアだよな。売れ行きだつて悪くはないんだ。ドアのベルを押して、こんにちは、はじめまして、こういうものですよって名刺を出す。それだけだよ。そのあとはいゆるゆる同胞のよしみというやつで、話はわりにとんとん進むからさ」 何かが突然頭の中のキイを叩いた。 「思い出した」と僕は言った。
P 37 14・17 「何故中国人相手に百科事典なんて売り歩く羽目になったのかは自分でもわからん僕にもわからなかった。僕が覚えてる限りでは彼は育ちも悪くはなかったし、成績だつてたしか僕より上のはずだつた。女の子にも人気のあつた方だろう。 「とても長く	P 35 6・14 「不思議なんだ。いったいどういう経緯で中国人相手に百科事典を売り歩くような羽目になったのか、自分でもまだよくわからないんだ」と彼は言った。すごく客観的な口調だつた。「もちろんひとつひとつの細かい事情は思い出せるんだけどね、それがひとつと結びつこうという方向に流れていくという、全体的なものが見渡せないんだ。でも気がつく、いつの間にかこうなっていた」 僕と彼とは同じクラスになったこともないし、それほど個人的に親しく話をしたこともなかった。知り合いの知り合いという程度の付き合いだつた。でも僕が覚えてる限りでは、彼は百科事典のセールスマンをやっているようなタイプの男ではなかった。育ちも悪くはなかったし、成績だつてたしか僕より上のはずだつた。女の子にも人気のあつた方だと思つた。 「まあいろいろあるんだけどね」とても長く
P 38 1 僕は黙って肯いた。	P 35 16・P 36 2 返事のしようもなかったから、僕は黙っていた。 「俺一人のせいばかりでもないんだ」と彼は言った。「いろんなややこしいことが重なつてね。でもまあ結局は俺のせいなんだけどさ」 僕はそのあいだ高校時代の彼のことを思い出そうとしていた。でもひどく漠然としか思い出せなかった。一度誰かの家の台所のテーブルに座つて一緒にビールを飲みながら音楽の話をしたことがあるような気がした。たぶんいつかの夏の午後だつた。でもそれも確かではなかった。それはすつと昔に見たまま忘れていた夢みたいに思えた。
P 38 2・6 「何故君に声なんてかけたのかな？ どうかしてたんだな、きつと。それとも生まれつき自己憐憫という能力に欠けているのかもしれない。まあなんにしても迷惑だつたらう？」 「いや、いいんだ。迷惑なんかじゃない」僕たちはテーブル越しに目を合わせた。「またいつか会おう」 僕たちはしばらく黙り込んだ。僕は煙草の残りを吸い、	P 36 3・9 「どうして君に声なんてかけちゃつたのかな？」と彼は自分自身に向つて問いかけるように言った。そしてしばらくテーブルの上のライターを指でくるくるとまわしていた。「まあなんにしても迷惑だつたらう？ 申し訳なかつたな。でも君に会えて懐かしかつたよ。何が懐かしいというでもないんだけどさ」 「迷惑なんかじゃないよ」と僕は言った。それは本当だつた。僕の方もとくに理由もなく、なんだか不思議に懐かしかつたのだ。 僕らはしばらく黙り込んだ。それ以上何を話せばいいのかわからなかつたからだ。それで僕は煙草の残りを吸い、
P 38 8・9 「あまり油を売ってもいられないんだ。他に売るものがあつてね」	P 36 10・13 そして椅子を少し後ろに引いた。「あまり油を売ってもいられないんだ

P 41 11	友よ、	P 41 9	革命家が	P 41 9	だからもう何も恐れるまい。クリーン・アップが
削除	P 39 15	熱烈な革命家が	P 39 14・15	だから喪失と崩壊のあとに来るものがたとえ何であれ、僕はもうそれを恐れまい。あたかもクリーン・アップ・バッターが	